

武者野洋子作・小川政弘脚色 **「若き命 燃やし尽くして」**

- ナレーション この小さなドラマを、今安らかに主のみもとにいる、武者野彰君にささげます。
- 武者野彰 (エコー)ただキリストに従い、謙そん、愛、赦し、清さを求めて祈るのだ。それだけだよ。
- (音楽) (賛美歌「手よ、みもとに近づかん」)
- 武者野洋子(彰の姉)(ナレーション) 弟の彰は、去年のイースターの日の朝、急性心臓発作で死にました。本当に短い一生でした。2 日後、教会で行われた告別式には、500 人近い方々が集まってくださいました。
- (効果音) (参集者のガヤ)
- 鈴木君 正直なところ、いまだに彼が天に召されたなんて信じられません。こうして今賛美していても、彼のあの大きくて、心の底からわき上がるような歌声が聞こえてくるようで、ふと周りを見渡したくなる思いでした。僕がこうして教会に来て、イエス様の愛のすばらしさを知ることができたのも、彼のお陰です。とにかく、“熱心”の一語に尽きる人でした。神はどうしてこの尊い器を、こんなに早く召してしまったのか。彼に頼り切っているわたしたち自立させるためか、あるいは彼が自分の体の強くないのも顧みず、あまりに熱心に奉仕している姿を、神が感心し、哀れんでくださり、日々望んでいた天国に召してくださったのか、などと考えたりしています。
- 三浦さん 武者野さんとは、一度だけですが文通をしたことがありました。彼の温かな励ましの言葉と聖句に、わたしはどれほど勇気づけられたことでしょう。受験を目の前にしながら長い手紙を書いてくださった武者野さんに心から感謝しています。
- 栗原君 彼とは、いつの日か一緒に神学校に入り、神様のためにあかし人としての生涯を送ろうと励まし合ってきたんです。その彼が死に、僕は今こうして生きている。なんかこう、“生かされている”ことへの感謝というより、怖さみたいなものを感じます。それは神様にとって、僕にはまだ地上にすべきことが残っていることだと思うんです。
- 前沢氏 武者野君は、ご覧のとおり盲人であるわたしに、とてもよくしてくれて、家にもよく訪ねてくれては、話をしてくれたり、賛美のテープを聞かせてくれたりしたんです。あの時は、もうほんとにうれしかったですよ。
- ナレーション 次々に彰の思い出を話してくださるのを聞いて、わたしの知らなかったことなども知らされ、弟ながら、今更のように彼の**一途な**信仰を思わされました。本当

にイエス様に捕らえられていたんですね。でも、昔からそうじゃなかったんです。

(音楽)

(ブリッジ)

ナレーション

彰は、1959年8月13日、群馬県館林で生まれました。小さいころの彼は、末っ子のせいかなん坊で、ちょっとしたことですぐ泣いてしまうような弱虫でした。その彼が変えられたのは、中学2年の時だったと思います。お友達との仲がうまくいなくて悩んでいたのですが、友人に誘われて初めて教会に行き、その場で素直にキリストを信じたのです。そして聖書を熱心に読み始めて、自分が罪びとでイエス様が必要だということがはっきりと分かったようです。その時から、次第に意志の強い、積極的な人間に変えられていったようですね。でも、本当に主のために生きる決心をしたのは、中3のバイブルキャンプの時だったようです。

説教者

皆さん、若い時は二度とは来ないんです。神のみ子は、君のために喜んで命を捨ててくださった。どうしたらそのイエス様を喜ばせる生き方をすることができるのでしょうか？ イエス様は、君たちの身も心もすべてをささげて、主のために立ち上がるのを求めていらっしゃるのです。あなたの若い命を傾けて、手のために生きる決心を今なさいませんか？

(音楽)

(BGM 賛美歌「いさおなき我を」)

彰モノローグ

“手のために、すべてをささげる。”…僕にはこの道しかない。神様、あなたに僕のすべてをお任せします。あなたのためにだけ、僕を生かしてください。どんなにつらいときにも、あなたの十字架の跡に従っていかせてください。

ナレーション

キャンプから帰ってからの弟は、確かに違ってきました。教会学校の教師を進んで引き受け、音楽による奉仕では、“ちいろば”というグループで、いつもギター片手に大きな声で賛美していました。死ぬ少し前には、念願の自作自演の歌のカセットも作ったんです。それから、暇を見つけては、友達をイエス様に導き、また手にある友を励ますために、電話をしたり、訪問や手紙を書いたり…。

彰

やあ、みんな。ごめん、遅くなっちゃった。

鈴木

あれ、彰。お前、大丈夫かよ。風邪で学校休んだんだろ？

早川

そうよ。そんな赤い顔して、まだ熱があるんでしょ？ ダメよ、無理しちゃ。

彰

うん。おとといの晩さ、友達5人に手紙書いてたら、いつの間にか夜が明けちゃってさ。ゆうべから寒気がしてとうとうやられちゃったよ。だけど今夜は大事な集会なんだから、そんなこと言っちゃいけないよ。じゃ始めは「何も隠さずに」からね。行くよ！

(音楽)

(ギターと歌)

ナレーション

本当に、アンナにやって体のほうは大丈夫かと思うほどでした。弟は、いつも

イエス様の前に、自分の信仰を厳しく見つめていました。少しでも自分の中に甘えやいい加減さがあると、そんな自分に我慢ができないようでした。ある時などは、霊的な勝利を得るために、4 日間も教会に泊まり込んで祈っていました。信仰的には先輩であったわたしにも、時には「お姉ちゃん、そんなことじゃダメだよ」なんてハツパをかけたたりして、時々やりあうこともありましたが、でも心の優しい弟でした。こんなことがあったんです。神学校で学んでるわたしが、初めての礼拝の説教をすることになって、準備していた時――。

- 女友達 洋子さん、お手紙よ。
- 洋子 ありがとう。(モノローグ)あら、差出人書いてないわ。
- (効果音) (封を切り、手紙を開く音)
- 洋子モノローグ あはん、彰ね。えーと、「秋も深まるこのごろ、お体の具合は良好でしょうか？(彰の声に)風邪にはルル、腹痛にはピタリ丸^{がん}が建前かもしれませんが、信仰者として、どんなときでも祈りつつ歩めるようになりたいものですね。さて、来る聖日にご奉仕とのこと。さぞかし感謝と喜びとに満ちていることでしょう。光栄でもありましょう。また反面、恐れと不安と苦悩もあることでしょう。こちらとしましても、心配と期待との混合心ではありますが、主の助けによって、主のみ霊によって語れますように。ここに率直に、批評とでも言うべきものを記しましょう。…(FO)
- ナレーション 弟はずっと日記をつけていました。今読んでみますと、本当に「信仰日記」なんですね。自分の弱さと、一人一人の魂の救いと成長のために苦しみながら、ひたむきにキリストに従おうとしていたことが分かるんです。主のための奉仕を第一に考えると、学校の活動ができないのが大きな悩みだったんですね。学校の試験のあとで、こんな一節があるんですよ。
- 彰 「10月10日(日曜)。昨日はテストで非常にめいっった気分であった。わたしはロバになりたい。英語がなんだ。点数がどうした。ほんの断片じゃないか！ 数学？ 命に関係があるのか。いいに越したことはない。だが最大関心事であってはならないのだ。アーメン。」
- ナレーション 勉強だけではありません。高校ではラグビーこそ男のスポーツとばかり練習に汗を流していましたが、どうしても信仰生活と両立できないと知ると、悩んだ末に、キリストにのみ従う決心をして、退部したんです。クラスメートからは、「アーメンちゃん」と言われながら、イエス様にすべてをかけた3年間。これが弟の高校生活でした。今ひとつ、彼の日記を開いてみます。
- 彰 「3月1日(水曜)。風強し。卒業式。久しぶりの学校、ああ、もうお別れた。やっ感慨がわいてきた。ああ3年間。いろいろあった。ラグビー部。つらかったが、楽しかった。体が許せばやり続けたかった。ああ僕は、教会のために学校生活を捨てたのだ。クラブも図書委員も、生徒会役員も、友達関係も、勉強も！

正直言って寂しい。今の状態じゃ許されなかったのだ。ああ僕の青春とはなんだったのか！ 主イエスを愛すること。これが僕の青春だったのだ。苦しみ悩む道。あえて僕は選んだのだ。ああ損だ。大損だ！ しかしキリストは、世界中で一番大損をした人物だったのだ。こんなおろかな者たちのために、自分の命を投げ出してしまったのだから。それに引き換え、考えてみたまえ。これほどの莫^{ほくだい}大な富を得たではないか。しかも、虫も付かず、さびも付かない朽ちぬ天に。ああ、なんと幸いなことだろう。」

ナレーション

それから約1か月後、大学受験直後の3月26日、イースターの朝5時ごろ、弟は急性心臓発作で天に召されました。彼の生き方をどう思われるか、それは皆さんにお任せします。でもわたしは、これが弟に一番ふさわしい生き方だったような気がするんです。イエス・キリストの者になった自らの若い命を、願っていたとおり、主のために燃やし尽くしたのですから——。

(音楽)

(ヘンデル「ハレルヤコーラス」)

ナレーション

(エコー)「彼は死んだが、今もなお、その信仰によって語っています。」(ヘブル人への手紙 11章4節)

<完>